

かが「ご苦労様」と声をかけた。寒かったが何か心温まる1日だった。今、これらのグループを中心にNPO活動推進センター造りが始まっている。

第二話—小さなビルの一室にて。庶民感覚にあふれた人達がワーカーズコープを作り、コミュニティケアをやろうと小さなビルの一室に集まった。出してある小さな机に皆が押し合うように顔を揃える。話し合いが始まって間もなく、ある会社を退職して活動してきたリーダーの1人が激しい口調で、中央から来ていた労働者の連合組織のオルグの態度を批判し始めた。地元の実情に合ったNPOを作ろうと努力を重ね、一定の人々が参加し実績も出てきつつある。そこへ中央の方針を上から持ち込もうとすると、自分も、地元の人もついて行けない

というのだ。オルグは、組織としての援助をするからには一定のアイデンティティが必要だと考えている。さらに、このリーダーの退職前とこのオルグの組織文化の違いが両者の関係を一層複雑にしているようだ。私は両者の間を暫く凍結してまた話し合うことを提案したが、結局、折り合いはつかず、リーダーは離脱を告げて退席した。彼と一緒に活動してきたこの会合の招集者である同年配の女性リーダーは、机に顔を伏せてしばし声を抑えて肩をふるわせた。それは悲しみの中に人間の真実味の持つ力強い美しさを宿していた。今、この女性リーダーを中心に再び態勢を整えて一からの組織造りが始まっている。

(金沢大学経済学部教授)

思い出すままに

平 館 道 子



金沢大学には29年6ヵ月お世話になりました。1970年の秋に赴任したときには、何の縁故ももたない金沢にこれほど長く居住することになるとは思ってもいませんでした。当時はま

だ法文学部経済学科で、法文学部には女性の先生はいませんでしたし、どう取り扱ったらよいかわからないという雰囲気、一日中会話をしなかったという日がよくありました。私の研究室は四階建の棟の三階にありましたが、そこには女性用のトイレもないという状態でした。法文学部は当時、哲学、史学、文学、法学、経済学の5学科

から成り、専門分野が多岐にわたり、さまざまな個性の先生たちがおられ、勉強にもなりましたし、学園紛争の直後であったこともあり、いろいろな事件がおきて、なかなかスリリングな経験をしました。

最初は城内キャンパスにあった宿舎に住んでいましたが、ここには雉をはじめ、さまざまな四季の小鳥や虫、狸、フクロウなどが訪れ、動物好きの私には愉快でした。また、夜おそくまで学生達の太鼓の音や人声が絶えず、静謐な中にも活気が感じられる環境でした。ときには生物観察の学生が庭にひそんでいて、驚かされたこともあります。城内宿舎はたいへん便利な場所にありましたので、ほとんどの用事は歩きですませることが出来ました。そのため、金沢の街のことをほとんど知らず、学生から馬鹿にされたものです。ここには、各学部の先生たちが居住しておられ、それぞれのご家庭の個性など観察でき、興味深いものがありました。もっとも、こちらも観察されていたと思いますが。小さな子が沢山いて、宿舎の広場でかくれんぼなど、毎日可愛い声が絶えず、まだ小さかった私の娘にとっても良い環境でした。城内宿舎には隣組もあり、先生方は何ごとにもなかなか理論家であることを、折りにふれて感じました。今も当時のおとなりさんたちとは親しくして頂いています。

金沢にきて最初の講義は法文校舎の30番教室で行ないました。大学院時代の非常勤も含めると、それまでに数年間の講義経験

はありましたが、対象は工学系の学生などでしたので、経済系の学生ははじめての経験で、緊張しました。なにしろ、勉強に頭をいためると、「修正フィリップス曲線とは？」などと研究室にとびこんできて、議論をふっかける学生がけっこういたからです。経済学科の定員は100名、学生の顔を見覚える程度の規模で、女子学生は多くても数名程度でしたが、個性的なひとたちであったと思います。あの頃はまだコンピューターが発達していなかったのが、今のように便利に使うというわけにはいきません。プログラムも工学部にあった情報処理センターの科学計算用ソフトを利用して、あとは自分で作らなければなりません。インプットもカードかテープで、城内キャンパスからセンターに送ると、2、3日して結果が返ってくるという調子でした。それがエラーであったりして、がっかりするというようなことはざらでした。そこで、学生の実習では、工学部のセンターまで行って計算するようにしていましたが、いま考



最終講義をされる平館先生

えると、学生達も、雪のなか、カードの入った重い箱をもって工学部までよく行ったものだと思います。逆行列のプログラムを学生が作り、小さい行列ならうまくいくのに、大きいものではめちゃめちゃな結果になってしまうのに、参ったこともありました。院生であったころはまだ言語は機械語かアナログでしたが、その頃はフォートランで、その後便利な言語が開発されましたが、私の知識はいまだにフォートランです。その後、田中勝人先生の努力で経済にカード穿孔機とリーダーが導入され、学生たちも工学部まで行かなくてもよくなりました。たいへんな進歩でした。

1980年の経済学部独立にはじまる大学改

革で、修士課程設置、キャンパス移転、博士課程設置、大綱化による改組と続き、緊張の連続でしたが、経済のスタッフのまさに適材適所という協力の力強さには感じいました。このプロセスで女性や若い同僚もふえ、経済学部の教育研究も幅と厚みを増しました。いま、大学は重大な状況に置かれていますが、経済のスタッフのかたがたが将来を切り開いていかれることを疑いません。最後に、若くして亡くなられた助手の前田恵美子さん、いまだに喪失感を拭えないでいる林宥一教授をはじめ、お別れした多くの先生がたを思い出すこと、しきりです。

(金沢大学経済学部教授)

CURES Report

サッカーW杯で日韓に問われる評価は

盛 大 衛

2002年サッカーW杯がスタート

日本と韓国が共同開催するサッカーの2002年ワールドカップ(W杯)について、これまでの報道をもとに共催が抱える問題点や地球規模の祭典に地域がどのように関わられるのか検証してみたいと思う。

1999年10月2日、FIFA(フィファ・国際サッカー連盟)理事会で大会会期が決

定した。開幕戦は6月1日ソウル特別市で、決勝は同月30日横浜国際総合競技場と決まり、いよいよカウントダウンが始まった。

また、大会初の公式行事となる大陸別予選抽選会が12月7日東京国際フォーラムで開かれた。前回優勝のフランス、開催国の日本、韓国を除く195カ国・地域がエントリーして残り29の出場枠に挑む。注目を集めた欧州の抽選は厳粛な中にも緊張感がみ